

おひざのうえで

(副園長の子育ておうえん通信) (2019 年 7 月)



「共 感 力」

せんりひじり幼稚園

副園長 安達かえで

先日、ホールの近くを歩いていると、頭から湯気が出そうなぐらいの勢いで怒っている年中組の A くんを見つけました。怒りで目に涙をためて、全身に力を入れて B くんを呼んでいます。どうしたのか聞くと、(一緒に鬼ごっこしていた) B くんがいきなり強く A くんを叩いてきたと言うのです。目に涙を浮かべ肩に力を入れて怒っている A くん、米田亜里沙先生が駆け寄ってきて「そうかそうか」と言って A くんを背中をさすります。そして少し離れたところにいた B くんを「ちょっと来て～」と手招きしました。

「B くん、A くんが怒っているんだけど、なんか知らない？」とありさ先生が穏やかに聞きます。

B くんは「知らない。」とそっけなく言いました。

そんな B くんをにらみつけるように A くんは「B くんがたたいた！！」と言い返します。

B くんは思い出したのか、「A くんが先に僕をたたいたから、たたいた。」と言い始めました。

ところが A くんは「たたいてない。」と言い張ります。

ありさ先生が「A くんはたたいてないって言うけど B くんは、A くんがたたいたと思ってるのね」と整理します。B くんは「うん、逃げてるときにここをたたいた」と右腕のひじのところをさすりました。

「そうなんだ・・・B くんは A くんがたたいたと思ったのね。」とありさ先生。

「B くんはきつくここをたたいてきた。」とお腹を押さえる A くん。

「もしかしたら、鬼ごっこで逃げているときにたまたま当たっちゃったのかもしれないね」・・・。「それで B くんはたたかれたと思って、強くたたき返したのかなあ・・・。A くんが当たったからかもしれないけど、でも、B くんはきつくたたかれて痛かったね。嫌だったよね。」というありさ先生の解説が進むにつれて、A くんは怒りのエネルギーが、まるで風船のようにしぼんでいくのがわかりました。そして身体の力が抜けて、うつむいてしまいました。B くんは目も申し訳なさそうです。

「B くんはどうする？」「A くんはどうしてほしいの？」とありさ先生がゆっくり穏やかに聞くと、A くんが「謝ってほしい」と言いました。「A くんは謝ってほしいんだって・・・。B くんはどうする？」と B くんは聞くと「ごめんね」と申し訳なさそうに謝っていました。A くんはすぐに「いいよ」と返していました。その後二人は又、鬼ごっこをしに帰って行きました。

大したことの無い小さなけんかかもしれませんが、こうして一つ一つ丁寧に気持ちにより添って、絡まった糸をほぐしていくような関わりをすることで、気持ちの整理ができます。そして相手の気持ちに共感する余裕が生まれます。このような経験を積み重ねることで、子どもたちはいずれ自分たちで話し合い、相手の気持ちを理解したり共感したりして、解決していけるようになります。事実関係や気持ちの一つ一つをほぐしながら、じわじわ～っと共感を呼び寄せるこのような交通整理を、先生たちはよくしますが、このときのありさ先生の関わり方も見事でした。

児童精神科医の故佐々木正美先生が、著書の中で、「友達に共感できる子ほど、自分を見つめる力も強い」と書かれています。「子どもは遊びの中で友達と自分が、意見や考え方が違うことに気付きます。その結果、あるときは自分の意見を押し通し、またあるときは友達の立場や主張を認めて優先させるなど、状況を見つめながら、自分の取るべき態度や役割を作り上げていきます。このようにして、子ども達は「相手を理解すること」と「自分自身への認識」を深めることを同時にやっていくのです。」と、佐々木正美先生。

友達への共感や理解が深まれば深まるほど、自分のことをよく見つめることのできる子になっていくとのこと。昨今の様々な事件を見ていると、本当に孤独な人ほど自分を見つめる力が弱く、些細なことで自分を見失い、衝動的な行動を取りやすいことを感じます。人間社会で生きていく上で、共感力が非常に重要な潤滑剤になります。自己肯定感も、親や他人から寄せられる共感によって育つと言えると思います。幼稚園の間に、様々なやりとりを通して、自分を受け入れられることと、友達の気持ちに共感する経験をたくさん積んでほしいですね。

.....
ご意見や感想があれば下記アドレスまでどうぞ。(必ずクラスとお名前を書いてくださいね。)

(返信はできないかもしれませんが・・・)

kaede@hijiri.ed.jp